

自ら考える力を育てる音楽教育 — 音の不思議に着目した音楽鑑賞教室の実践 —

東京都港区立芝小学校

教諭 馬場千鶴子

E-mail chiko@mx.d.mesh.ne.jp

(2000年8月18日受理)

1 はじめに

港区の芝公園に隣接する本校は、児童数104名からなる、開校122年目の伝統のある小学校である。近くに芝公園があるものの、学校のまわりはコンクリートのビルに囲まれた都会的な環境の中にあり、自然や遊び場は少ない。

しかし、小規模校のよさを生かして、一人一人の児童が自分の興味のある学習について、自分の力で直接解決したり、体験したりできるように、創意ある教育活動を教職員が一丸となって展開している。

筆者は本校に所属して6年目を迎える音楽専科で、全学年の音楽の授業を担当し、音楽活動や全ての教育活動を通して児童の豊かな心を育てることを目指している。また、日頃から児童が感じる小さな疑問や、直感的な感動を大切にしたい指導の展開を心がけている。音楽教育としてだけでなく『音』に対して総合的に捉えることができるような小学校での実践をここに紹介し、感性を刺激する教育の重要性を説くものである。

2 自ら学び、自ら考える力の育成

平成10年、学習指導要領が改訂され、平成14年度全面実施に向けて、今年度から移行期に入った。

この改訂は、いじめや不登校などの今日の教育課題を受け、これからの学校教育の在り方を「ゆとり」の中で自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を基本としている。

音楽科においても改訂の方針に基づき、情意面と能力面のバランスのとれた音楽教育をすすめることを重要視し、教科の目標と内容を改善している。

つまり、小学校における音楽教育では、児童一人一人が自らの感性を豊かに働かせながら様々な音楽にかかわり、楽しく音楽経験を重ねることによって、音楽活動の喜びを味わい、生涯にわたって音楽に親しむことを目標としている。学習内容も2学年にわたってねらいが達成できるように、ゆとりをもって学習活動を展開したり、楽器の選択幅が拡大されたり、児童の創造的な活動を充実したりすることができるようになった。

そこで、本校の音楽科の指導においても、音楽の技能の習得のみに陥らず、

児童自身が自らの課題を見つけて、音楽の学習を展開できるように授業の内容や活動を工夫している。そして、児童が進んで音楽活動に取り組み、音楽の基礎的・基本的な内容の定着を図るとともに、自己の生活を潤いのある豊かなものにすることができるような授業を展開している。

また、本校では平成10・11年度に港区の教育奨励校の指定を受けて、「自ら調べ、考えを深める児童の育成」を主題に校内研究をすすめてきた。

最初は、指示待ちで与えられた課題にはまじめに取り組むが、自分から疑問を解決する方法を見付けたり、そのための計画を立てたり、実際に自分の目や手で確かめたりする学習に慣れていなかった児童が、地域の人とかかわる様々な体験や、自分の課題にあった解決の仕方を経験し、自分の思いや願いを実現していく中で、次第に自己の課題を解決したり探求したりしていく力が身に付いて来た。

今年度は同じ研究主題で、総合的な学習の時間を通して、児童自身が自分の課題を見付け、自分の力で解決し、自分なりの知識を獲得して再構成したり、実践したりする力を育成する支援のあり方を追究している。

3 音楽鑑賞教室の実際

平成11年度、港区スポーツふれあい文化健康財団が、区内の小学校で日本フィルハーモニーのメンバーによる芸術教室の助成をしていることを知り、希望したところ、本校では11・12年度と続けて実施することができた。

そこで、音楽科の学習の場面で「自ら調べ、考えを深める児童」を育成する学習活動の一つとして、金管5重奏の鑑賞と『楽器の不思議を調べよう』という題材を、4年生以上の高学年の合同授業として設定した。担任の協力も得て2時間をかけて、学年の枠を取り払い、児童の個々の興味・関心のもとに探求活動を展開することができる音楽鑑賞教室を実施した。

(1) 児童の音楽に対する興味・関心

本校では、4, 5, 6年生の児童は音楽の授業の他に、課外の活動で金管バンドを編成している。40数名の4年生以上の児童のうち、毎年30名以上の児童が入部を希望し、音楽に対する興味・関心は高い。

金管バンドの児童はトランペットやトロンボーンなどの華やかな音色に憧れ、毎週水曜日の下校前に40分ほど練習をし、運動会や卒業式、毎学期の始業式、終業式などで演奏をしている。また、金管バンドに所属していない児童も木琴などの鍵盤打楽器や、エレクトーン、シンセサイザーなどを演奏し、合同合奏を楽しんだり、音楽会では、1, 2年生の鍵盤ハーモニカや3年生のリコーダーを交えて、全校で合同演奏をしたりしている。

(2) 平成12年度 音楽鑑賞教室

日本フィル音楽鑑賞教室は、演奏会・合同演奏・課題解決コーナーの三部構成にし、一人一人の児童が本物の音と直接ふれあうことを通して、音楽への興味・関心をさらに深め、美しいものに感動する豊かな体験の場となるようにした。

また、今年度は5, 6年生は2回目ということもあり、金管5重奏に打楽器奏者を加えて、より幅広い音の響きを楽しむとともに、課題解決コーナーで理科学的な疑問を解決する支援として、東北大学の本堂毅氏をお招きすることにした。

事前に、授業のねらいと準備する内容を日本フィル・本堂氏と打ち合わせ、次のような実施案を提示した。

音楽鑑賞教室 実施案

H. 12. 7. 6

音楽科

1. ねらい (1)生の演奏を聴いたり一緒に演奏したりすることによって、音楽への興味・関心を高めるとともに、美しいものに感動する豊かな感性を養う。
(2)音楽や楽器に関する自分の課題を自分の力で解決できるようにする。

2. 日 時 平成12年7月17日(月) 5, 6時間目
(1時間音楽, 1時間ゆとり扱い)

3. 場 所 本校体育館 (控え室に 多目的ホール、1階会議室 使用)

4. 対照児童 4, 5, 6年児童

5. 演 奏 日本フィルハーモニー交響楽団より 6名
スクール・サポーター 本堂 毅 氏 (東北大学)

6. 内 容 (1)演奏会 (楽器紹介を含む)
(2)合同演奏「サモア島の歌」
(3)楽器の不思議を調べよう (課題解決の時間)

7. 当日の時程と準備

11:00頃 日本フィルメンバー来校 代表高橋さん 車2~3台
多目的ホール 音出し 譜面台の用意(馬場)
1階会議室 湯茶・灰皿の用意(主事)
13:35 4, 5, 6年生は体育館に移動する。
持ち物 楽器, 筆記用具, ワークシート
体育館に楽器をおいてからパイプ椅子を並べる。
13:40 演奏会 開始
譜面台6本(馬場)
マイク2本(高島) ビデオ録画(後藤) 写真(佐藤)
15:15 終了・片付け

(3) 内容と児童の活動

<演奏会>

体育館のフロアーに、日本フィルのメンバー6人と児童が互いに扇状に向かい合い、静寂の中にも熱気に満ちて演奏会が行われた。児童は目を輝かせ、時には身体でリズムを取りながら、プロの演奏家の美しい響きに感動し、聴き入っていた。

楽器の紹介の場面では、自分が経験したことのある楽器を食い入るように観察したり、演奏の技法に歓声を上げたりしながら楽しんでいた。

<合同演奏>

平成11年度は「校歌」と「わんぱくマーチ」を、平成12年度は「サモア島のうた」を教師の編曲と指揮による合同演奏を楽しんだ。いずれも、自分たちと同じ楽譜を演奏するプロの音の響きの違いに感動し、あこがれをもって聴きながら、気持ちよく演奏していた。

プログラム

1. 吟遊詩人のソナタ 作曲者不詳
2. ルネッサンス・ダンス スザート
3. トルコ行列 星野究編曲
4. ザ・チャレンジャー ハール
5. 晴れのちブルー 星野・福島編曲
6. ウェスト・サイド・ストーリー より
バーンスタイン
7. フランス民謡集 パルヴォートゥー

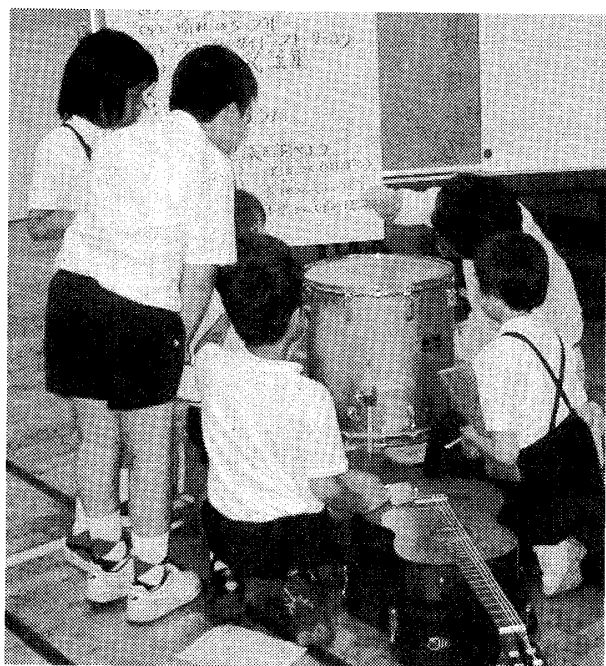


＜課題解決コーナー＞『楽器の不思議を調べよう』

児童がプロの演奏を聴き、直接感動を体験することも大切であるが、音の出る不思議や、どうしたらもっときれいな音を出すことができるか、演奏の技法や練習の仕方、楽器の仕組みなどを自分の言葉で質問し、解決することも重要な経験である。

体育館の四方に分散した演奏者のところに、児童はワークシートや楽器、ばちなど、思い思いのものをもって質問に行く。そこで、自分が納得するまで質問し、自分の予想と比べたり、分かったことをワークシートに書き込んだりしていく。

事前の授業で、児童一人一人が楽器に関する疑問や質問を考える機会をつくった。平成11年度は「音楽の歴史」や「楽器の由来」、「楽器の仕組み」、「演奏の工夫」、「音の出る不思議」などについての疑問があげられた。当日解決しきれなかった疑問については、後で本やコンピューターを使って調べる姿が見られた。



平成12年度は前年度の疑問に加えて、「楽器の種類」、「楽器の素材」などの他に、「演奏の上達する方法」、「演奏者に聞きたいこと」などの人とのかわりを感じる質問があげられた。

児童は自分の楽器を演奏者の所にもっていく、「どうやったら高い音を出すことができるますか?」「指を速く動かすにはどのような練習をしたらいいですか?」と必要感をもって、音のなる仕組みを聞き出していた。また、チューバの前に手をかざして、その音量を音色や響きだけでなく、音の振動として身体全体で感じていた。

さらに、「なぜ、音は振るえて鳴るか?」についてはギターを用いて説明する本堂氏の周りを囲んで、話に熱心に聞き入っていた。

児童が事前に考えた、楽器の不思議についての疑問・質問の中からいくつかを次にあげる。

日本フィルハーモニー 音楽鑑賞教室 2000. 7. 17

楽器の不思議を調べよう

	疑 問 ・ 課 題
音 の 不 思 議	なぜ音はふるえて出るのか
	木琴はなぜなるか
	シンバルはどうして高い音が出るのか
	太鼓は片っぽをたたくと片っぽもふるえるのはなぜだろう
	リコーダーや縦笛はなぜ穴をあけるか、 後の穴を少しあける(サミング)と高い音が出るのはなぜか
	太鼓のたたく所は両面ふさがれているのにどうして響くのか
演 奏 の 技 法	トロンボーンのスライドをどうやったら速く動かせるのですか
	トランペットはどうして息や口で音が変わるのですか
	なぜリコーダーと金管楽器の音の出し方がちがうか
	なぜ金管楽器は吹くだけで音が出るのか
	高い音を出すにはどうすればいいか
楽 器 の 素 材	シェーカーの中に何が入っているか
	大太鼓のまくは何でできているのか
	鉄琴の下レバーをふむと高くなる(響く)のはなぜですか
	太鼓の大きいものや小さいものは音が全部ちがうか
	金色と銀色の楽器は音色がちがうのか
人	一番好きな曲は何ですか 得意な曲は何ですか
	好きな音楽家は誰ですか
	金管楽器をやるきっかけになったのは何ですか
	何曲ぐらい曲を吹きましたか 一番多く吹いた曲は何ですか
	今まで一番むずかしかった曲は何ですか
	何才から練習してふけるようになりましたか
	一日どれくらい吹きますか
	あなたは何種類ぐらいの楽器が吹けますか

(4) 音楽鑑賞教室の成果

児童は第3学年の理科の学習で、音の振動や伝わりについて学習した経験があるが（平成14年度からは、中学校の第1分野の学習内容へ移行統合）、実際に自分が操作している楽器をもとに、『音』の不思議を感じ取ることは有効な動機づけとなっていた。

また、演奏者から直にアンブシュア（楽器にあてがう唇の形）や息の強さを教えてもらいながら、倍音の感覚を捉えることにより、音の高さの違いを直感的に感じていた。

さらに、『音』のもつ可能性を感じて、次の自分の課題やめあてを見付けることができた。

最後に、理科や音楽の時間に得た知識を自分の手で確認し、演奏家とのコミュニケーションを通して、自分の体験として身に付けることができた。

これらのことにより、音楽鑑賞教室を発展させて、移行期にある総合的な学習と関連づけることもできると考えられる。

4 身の回りの音に気付く学習活動

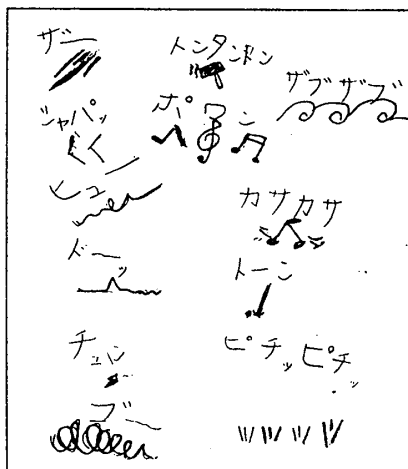
テレビ・ラジオ・スーパーのBGM・駅のアナウンス・・・今、私たちの回りには音があふれている。

しかし、児童は生活の中で、身の回りの音に気付かないまま過ごしていることが多い。「何の音だろう？」という疑問は、耳を澄ましたり音を想像したりする活動を、教師が意図的に計画しない限り、無意識に通り過ぎてしまう。

芝のまちの音をさがそう 4年（ ）

5月10日 場所 シーバンス

聞こえた音を書きましょう。



そこで、第2学年のいろいろな楽器の音色に親しむ活動の中で、生活科の授業と関連させた、『がっこうの音さがし』という題材では、生活科で探検をしたいろいろな場所に行って、どんな音がするか見付けてくる活動を展開した。給食室の作業する音、幼稚園の鳥の鳴き声、職員室のパソコンの音、教室の授業の音、校長室の風鈴・・・といった様々な生活の音にも気付くようになった。

見付けた音を言葉で模倣したり、楽器で表現したりして、音に対する興味

第4学年サウンドスケープの活動のワークシートを広げていくことがねらいである。

また、第4学年では、学校の屋上に上がり、サウンドスケープをした。目を閉じて2分間じっと耳を澄ますと、「日比谷通りを車が走っているよ。」「ヘリコプターが飛んできた。」「工事現場の音がする。」と、街の中の音に気付く。そこで、自分たちの住んでいる街の中で表現したい音のする場所を選んで、グループに分かれてサウンドスケープをしてきて、音楽をつくって表現する活動『芝の町を音楽であらわそう』をした。児童は見付けた音を動機としてそれをもとに旋律やリズムを創作し、写真や絵も用いながら、芝公園の四季・商店街・シーバンスの噴水といった、芝の町を音楽で紹介する活動をすることができた。

このような『音』に敏感に反応できる心と態度を育てていくと、高学年になって、合奏の中で木琴や鉄琴などの楽器を演奏するとき、どんな音を出したいか、自分で考えることがスムーズにできるようになる。

マレット（ばち）の材質の違いによって、どんな音が出るか、それまでの自己の経験と感性で選択したり判断したりすることができるようになる。

そして、音と静寂の織りなす音楽の美しさに気付くためには、静寂の美しさに気付くことも重要なのである。

5 手づくり楽器の活動

手づくり楽器の活動も、楽器をつくる活動を通して、児童は音の出る原理や楽器の構造などを自分の手で確かめることができる。

楽器の製作については、身の回りにある物や廃物を利用してつくることが多いが、①叩いて音を出す楽器 ②振って音を出す楽器 ③擦って音を出す楽器 ④弾いて音を出す楽器 ⑤吹いて音を出す楽器の中から、どんな音のする楽器をつくるか、計画を立てて、素材を選んで製作するように指導している。

マラカスをつくった児童は、容器の素材や、中に入れる物（米・小豆・小石など）の違いによる変化に気付きながら製作することができた。

また、手づくり楽器が発する音は小さいことが多い、そこで、楽器を共鳴させるための工夫や、覆いを付けて音を大きくするなどの試行錯誤が見られた。

小さい音のよさにも気付き、空き缶の中に水を半分くらい入れ、さらにもう一つの空き缶を組み合わせて、水の流れる楽器をつくり、耳元で響く水の音を「癒やしの音」と表現していた。

教師が作った2m×1mほどの丈夫な布製の袋状の物の角にホースを付け、中の空気を押し出しながら即興的に音を出す楽器は、全身で空気と音に関わり楽しみながら活動していた。

6 まとめ

発達段階に応じて『音』に気付くような活動を取り入れていくと、自分から音に気付き、音の出る不思議を解決しながら、自分自身がイメージする音を表現していくようになる。

このことは、音楽科の活動としてだけでなく、平成14年度から完全実施される総合的な学習の中で、自分で課題を見付けて解決していく学習に相通じるものが含まれていると考える。

『音』を知性と感性の両面からとらえることが、児童の総合的な思考力を広げ、多様な探求活動に発展していくことができるのである。

そして、何よりも「自分で解決したい。」と思えるような動機づけが重要であり、そのきっかけとして、音楽や生活、遊びなどがある。そこから始まる「なぜだろう?」「やってみよう。」という好奇心の芽を、学校教育の早い段階で十分に培っておきたい。そのことが児童の学びの質を高め、自己教育力を育て、やがては生涯学習の基礎となると考える。

参考文献

小学校学習指導要領

音楽で拓く「総合的な学習」

オルフの音楽教育

教室の扉

佐野 靖

宮崎幸次

マリー・シェーファー 高橋悠治訳

文部省

教育芸術社

レッスンの友社

全音楽譜出版社

